↑❶うつのみや遺跡の広場（縄文時代前期の根古谷台遺跡）

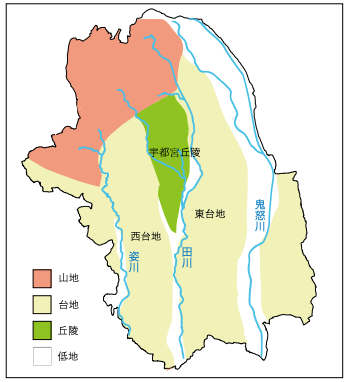
わかるかな？

下の①～③の写真は、
宇都宮の遺跡で発見された遺物です。
何時代のものか線で結んでみましょう。

①　②　③

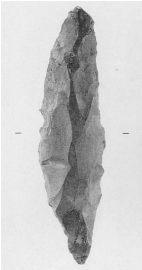
縄文時代　弥生時代　古墳時代

1 宇都宮の幕開け



↑❷宇都宮の土地
北部の古賀志山地、そこからのびる宇都宮丘陵の先端部に、中心市街地が形成されています。市内には鬼怒川、田川、姿川の３本の川が流れ、その間に安定した台地が形成されています。

→❸宇都宮清陵高校地内遺跡から出土した石器



動画を見てみよう！

宇都宮のはじまり

私たちの住む「宇都宮」には、いつ頃から人が住み始めたのでしょうか。今から３～４万年前のこと、日本列島がいまだ大陸と地続きだった頃に、ナウマンゾウやオオツノジカなどの狩りをしながら移動して暮らす人たちの痕跡が、宇都宮で見つかっています。

南北に流れる多くの川に挟まれた台地❷は、人々を水害や大地震から守り、安心して暮らすことができるため、縄文時代になると人々は洞穴や竪穴住居に住み、定住生活が始まったことで、人口は徐々に増加していきました。

その後、さらに人口は増えていき、現在の姿になっていく訳ですが、なぜ宇都宮に人々が集まるようになったのかを調べ、宇都宮のまちの発展の歴史をひも解いていきましょう。

左の写真は、宇都宮清陵高校の校舎を建てる前の発掘調査で見つかった石器❸だよ。旧石器人は石を加工し、狩猟などの道具として使っていたんだね。

宇都宮市内には、縄文時代の根古谷台遺跡❶（➡p.12）や奈良時代の上神主・茂原官衙遺跡（➡p.11）など、国の指定を受けるほどの重要な史跡が残っているようだよ。

宇都宮に住む当時の人々はどんな暮らしをしていたのかな？ ➡p.12

宇都宮に遺跡があるようだけど、どのくらいあるのかな？ ➡p.19

学習問題　なぜ宇都宮に人が集まったのだろうか。

縄文・弥生時代の宇都宮

宇都宮は、昔から、自然災害が少なく水資源にも恵まれていました。縄文時代になると、気候の温暖化により豊かな森が形成され、さらに住みやすい環境が整います。宇都宮においても、この時代に定住し、集落を形成した跡が確認されています。人々の生活の変化を見ていきましょう。

1 定住生活のはじまり

縄文時代のはじめ頃になると、次第に温暖化し、土器が発明されます。この時期の居住地として洞穴を利用した大谷寺洞穴遺跡（大谷町）が有名です。洞穴内からは、土器や石器のほか人骨❹も発見されています。一方、平地には竪穴住居が造られるようになります。野沢遺跡（野沢町）の竪穴住居跡❺は、１万２千年前と推定されるもので、定住生活が定着し、豊かな縄文文化の出発点を物語る貴重な遺跡です。

2 拠点となるムラの出現　根古谷台遺跡 ➡p.12

縄文時代前期になるとさらに文化が充実します。根古谷台遺跡（上欠町）は、その時期に営まれた大規模な集落跡です。姿川沿いの台地上に営まれた集落で、中央に広場があり、その周囲を大型建物が取り囲んでいました。広場内には約300基の墓穴があり、その一部の墓穴から耳飾り❻や管玉が出土していることから、このムラのリーダー的存在の人物の墓と考えられます。

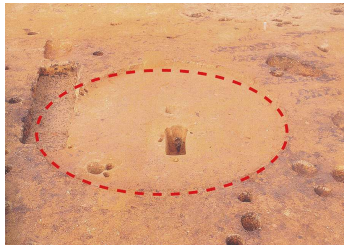
3 気候変動による人口の増減

縄文時代中期までは、温暖な気候が続き、人口が増加し、竹下遺跡（竹下町）や、御城田遺跡（駒生町）、下西原遺跡（上籠谷町）、梨木平遺跡（高松町）などで、この時期の集落跡が多く見つかっています。ところが、その後、縄文時代後期から晩期にかけて、次第に気温が下がり、人口が減り、集落の数も少なくなりました。この時期の遺跡からは子孫の繁栄や社会の安定などを願って作られたと考えられる土偶❼等、様々な祈りの道具が出土しています。

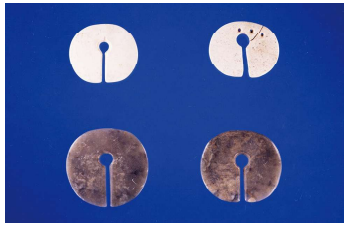
4 縄文的色彩が残る弥生時代の宇都宮

宇都宮市内の弥生時代の遺跡は、他の時代に比べると少なく、集落の規模も小規模です。生活で使用する道具は、縄目の文様を付けた弥生土器❽や石器などで、縄文時代以来の採集生活の割合が大きく、稲作はまだ十分に発達していなかったようです。墓は土器の中に甕を入れて埋葬する形態のものが見つかっています。

↑❹大谷寺洞穴遺跡で発見された縄文人骨（大谷寺蔵）

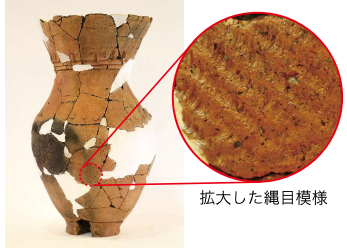


↑❺縄文時代草創期の竪穴住居跡（野沢遺跡）



↑❻縄文時代前期の耳飾り（根古谷台遺跡）

↑❼縄文時代晩期の土偶（刈沼遺跡）



拡大した縄目模様

↑❽縄目の文様をつけた弥生土器（本村遺跡）

ことば

❶ **畿内**
古代の行政区分。山城、大和、河内、和泉、摂津の五か国の総称。今の京都府、奈良県、大阪府、兵庫県の一部。

↑❶愛宕塚古墳（茂原古墳群）出土の鏡

↑❷笹塚古墳

↑❸瓦塚古墳の人物埴輪

↑❹長岡百穴古墳

▷古墳時代の宇都宮

古墳時代には、宇都宮市内にも数多くの古墳が造られました。古墳の形や出土品などから、畿内❶地方の大和政権との交流がうかがえます。宇都宮に花開いた、古墳の文化を見ていきましょう。

1 古墳時代の幕開け

宇都宮における本格的な稲作は、古墳時代になってからです。この時期の遺跡からは、東海や南関東地方で使われていたものと同じような土器が出土することから、人の移動により古墳文化が広がってきたと考えられます。

茂原古墳群❶（茂原町）は、３基の前方後方墳で構成され、市内で最も古い古墳群です。

2 大型前方後円墳の登場

大阪平野に巨大な前方後円墳が造られた５世紀に、田川流域に笹塚古墳❷（東谷町）、姿川流域に塚山古墳（西川田町）が造られました。いずれも古墳の大きさが100ｍ前後の大型前方後円墳です（➡p.13）。これまでの小地域を治める有力者から、より広範囲な地域を治める首長（豪族）が登場したことを物語っています。これらの首長は、大和政権とも強い結びつきを持っていたと考えられます。

3 宇都宮北部への古墳文化の波及（➡p.14）

６世紀になると、宇都宮北部の丘陵上に多くの古墳が造られます。瓦塚古墳群（瓦谷町）は、前方後円墳１基と円墳約40基からなる市内最大規模の古墳群です。

前方後円墳である瓦塚古墳は、この地域を治めた人物の墓と考えられ、人物埴輪❸や家形埴輪などが出土しています。

この時期の古墳は追葬が可能な横穴式石室（➡p.14）で、家族や親族などが葬られたと考えられます。

4 凝灰岩を掘りこんだ 長岡百穴古墳

長岡百穴古墳❹（長岡町）は砂質凝灰岩が地表に見えている丘陵の斜面に掘りこまれた、横穴式の群集墓です。７世紀頃に造られたと考えられます。石室部分にあたる横穴52基全てが、南を向いて開口しています。横穴には、扉石をはめこんだと見られる切りこみがあり、ほとんどの横穴には扉石があったと考えられています。

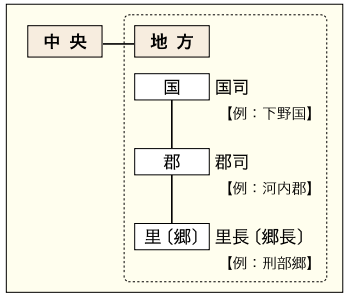
各横穴に彫られている仏像は、後世に彫られたものです。

▷奈良・平安時代の宇都宮

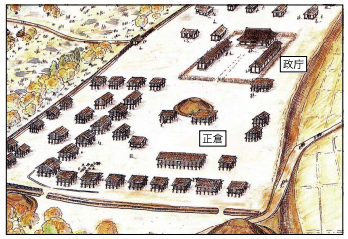
701年に大宝律令が制定され、次いで710年に奈良の平城京に都が移され、律令国家の体制❺が確立します。

下野国を治める国府は現在の栃木市に置かれました。国はさらに郡・里（郷）に分けられ、それらは郡司や里長に任命された地方の豪族が治めました。宇都宮は河内郡に属し、郡を治める役所（上神主・茂原官衙遺跡）が宇都宮市と上三川町の境に置かれました。

この頃、中央と地方を結ぶ道路網が整備され、政治の命令、税物の運搬、軍事用として利用されました。宇都宮では、東谷・中島地区遺跡群（インターパーク）や上野遺跡（平出町）で東山道と考えられる道路の跡が見つかっています（➡p.17）。



↑❺律令制下の地方組織



↑❻上神主・茂原官衙遺跡イメージ図

1 古代河内郡の役所跡　上神主・茂原官衙遺跡

上神主・茂原官衙遺跡❻（茂原町）は、古代河内郡の役所跡と考えられる遺跡です。遺跡内には政務を司る政庁、税として納められた稲等を収める倉庫が集まる正倉❷群が見つかっています。

2 刻書瓦の出土

上神主・茂原官衙遺跡内の正倉群の中に、屋根に瓦を用いた大規模な建物が１棟見つかっています。その瓦の多くに、「雀部」「物部」「酒部」などといった人名が書かれています❼。奈良時代に河内郡に住んでいた約100人の名前を知ることができる、とても貴重な資料です。

3 池辺郷と二荒山神社

『倭名類聚抄』という書物には、河内郡内に存在したムラ（郷）の名前が書かれています。その一つに池辺郷があります。二荒山神社前の釜川沿いには昔、「鏡ケ池」がありました。その周辺に発達した大きなムラが「池辺郷」と考えられます。

平安時代には二荒山神社がこの地域の守り神として信仰を集め、その門前が次第に発展していくことになります。

↑❼上神主・茂原官衙遺跡出土の人名文字瓦
「マ」は「部」の「阝」を省略したもの。左は「ささきべしょうまろ」、右は「しらべえみし」と読みます。2024（令和６）年８月27日に国の重要文化財に指定されました。

ことば

❷ **正倉**
律令制下、中央・地方の官衙・寺院等に設置された倉庫。

まとめる ひろげる

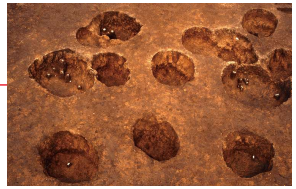
自然豊かな宇都宮では、古くから、川が近く安定した台地の上で人々が暮らしてきました。古墳時代から奈良時代にかけては、宇都宮南部に豪族の館や郡を治める役所が設けられ、その周辺に人々が集まりました。その後、二荒山神社が地域の守り神として信仰を集め、現在の市内中心部にも多くの人が集まってきました。

根古谷台遺跡の発掘調査から保存・整備へ

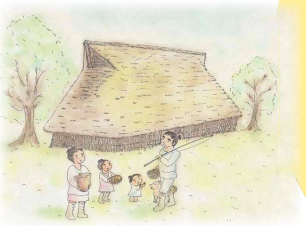
1 墓園造成に先立つ発掘調査

上欠町にある聖山公園を造る前、1982（昭和57）～1987年度にかけて発掘調査が行われました。調査を進める中で、縄文時代前期の大規模集落跡が発見されました。当時のムラは、数軒程度の竪穴住居で構成されるのが一般的でしたが、根古谷台遺跡は中央に広場と集団墓地を設け、その周りに特殊な構造と大きさをもつ建物が立ち並ぶ大規模なムラであることが判明しました。

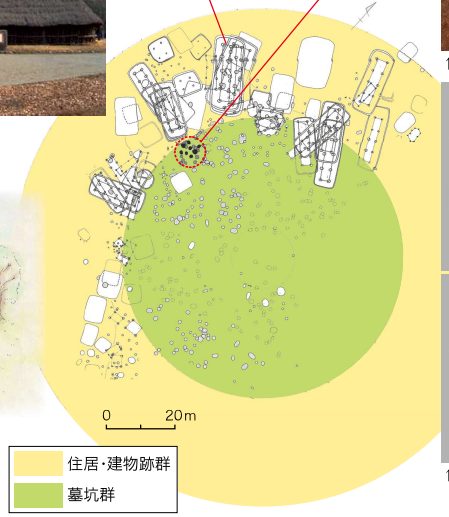
↑❶復元された大型建物

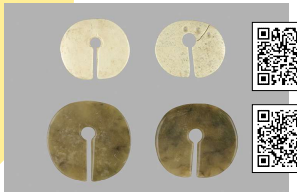


↑❷耳飾りや首飾りが出土した墓坑群



↑❸縄文人のくらし





↑❹（上）出土した首飾り
（下）出土した耳飾り
（国重要文化財）

2 遺跡の広場の整備

重要な遺跡であることが判明したことから、1987年に遺跡の保存が決定し、翌年に国指定の史跡となりました。その後、復元建物等が整備され、1991年には「うつのみや遺跡の広場」としてオープンしました。

園内には、縄文時代の建物を復元したものやその時代の人々の暮らしを紹介する資料館があります。

↑❺「うつのみや遺跡の広場」と資料館

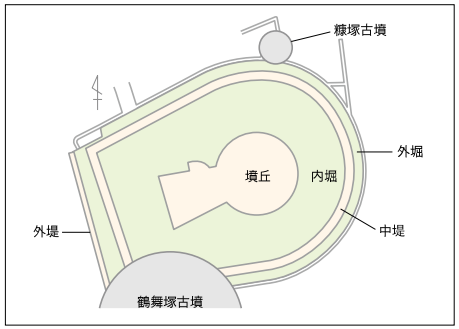
ニッコウキスゲの自生地

園内には、本市ではめずらしいニッコウキスゲの自生地があります。毎年5月にはニッコウキスゲが満開となります。

市内に所在する2つの大型前方後円墳

1 市内最大の前方後円墳 笹塚古墳

5世紀の中頃に、市内最大の笹塚古墳（東谷町）が造られます。この古墳の近くには、埋葬者が生前に生活していたと考えられる館とその周辺に暮らす人々のムラの跡が発見されています。笹塚古墳は、墳丘の長さが105mある大型の前方後円墳で、埴輪、葺石、二重の堀を備えており、近畿地方の大王墓と同じような特徴を持つ古墳です。



↑❻笹塚古墳平面復元図

↑❼笹塚古墳周辺写真

2 塚山古墳群

西川田町にある5世紀後半の古墳群。塚山古墳は墳丘の長さが98mある大型の前方後円墳で、このほかに、塚山西古墳、塚山南古墳の2基の前方後円墳と複数の円墳や埴輪棺により古墳群が構成されています。この地域を支配していた一族の墓と考えられます。

↑❽整備された塚山古墳（西川田町）

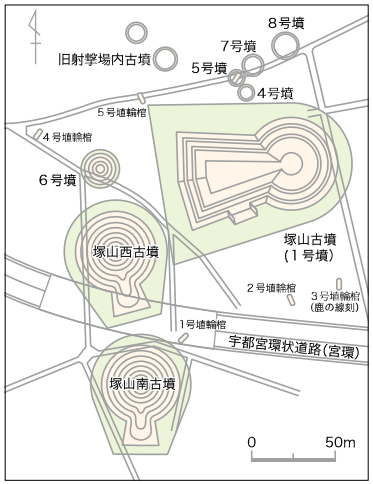
ことば

❶埴輪棺
墳丘上に立てられる円筒埴輪を転用し棺として使用したもの。

↑❾除草活動

3 古墳の整備と保護活動

県総合運動公園に近接する塚山古墳は、5月になるとサツキやツツジがきれいに花咲きます。これは、個人の所有者が古墳の形をわかりやすくするために整備したものです。この古墳群を保護するために、所有者や地域の人々、若松原中学校の生徒たちが除草活動などを続けています。



↑❿塚山古墳の配置図

宇都宮北部丘陵上の古墳群

1 豊郷地区に残る宇都宮北部丘陵の古墳

宇都宮北部丘陵上の田川周辺には、多数の古墳が、今も残っています。[1]

豊郷地区では、古墳を結ぶ散策路を、「まほろばの道」として整備しています。

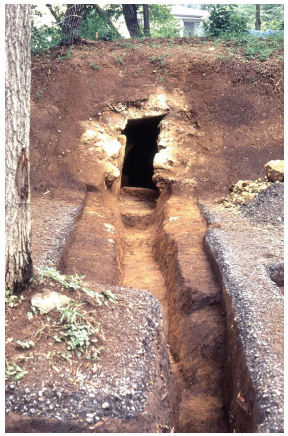
また、長岡百穴古墳、瓦塚古墳群、谷口山古墳群、北山古墳群の保護活動[2]を地域の人々や豊郷中学校の生徒たちが行っています。

2 新たな埋葬方法の導入

6世紀になると、宇都宮北部の丘陵上に瓦塚古墳群、谷口山古墳群、戸祭大塚古墳群など多くの古墳が造られるようになります。これらの古墳の埋葬施設は、従来の竪穴式の埋葬方法でなく、追葬が可能な横穴式石室です。この葬法は朝鮮半島から伝来したもので、北山霊園内にある北山古墳群は、市内でいち早く新しい埋葬法を導入した古墳群です。[3]

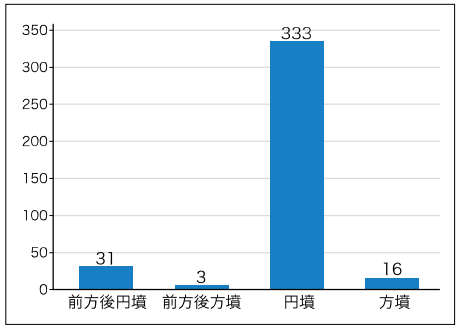
↑❶宇都宮北部丘陵上の古墳群の配置図

↑❷生徒たちによる除草活動



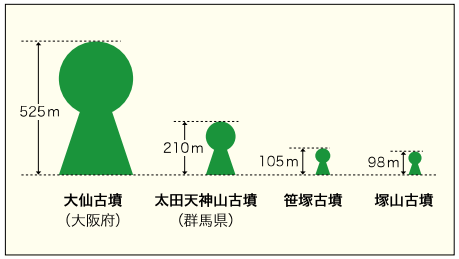
↑❸谷口山古墳の横穴式石室（長岡町）

さまざまなデータから古墳に埋葬された人物像を考えてみよう



↑❹現在確認されている宇都宮市内の古墳の数

現在、宇都宮市内には400基近い古墳が確認されています。[4]その多くが円墳です。前方後円墳は、より力を持った人物の墓と考えられます。



↑❺5世紀の古墳の大きさ比較

大仙古墳（大阪府）は日本で一番大きな古墳で、太田天神山古墳（群馬県）は東日本で一番大きな古墳です。

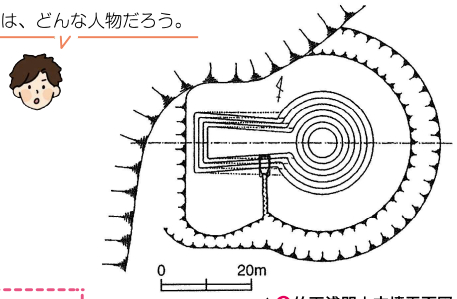
この2つの古墳と同じ5世紀に造られたのが笹塚古墳と塚山古墳です。この時期に造られた県内最大の古墳は笹塚古墳です。

竹下浅間山古墳

この古墳に葬られた人は、どんな人物だろう。

竹下浅間山古墳[6]（竹下町）は、1973（昭和48）年に発掘調査が行われました。その結果、墳丘の長さが42mある前方後円墳であることがわかりました。

横穴式石室からは埋葬された人物の様子を物語る多くの副葬品[7～12]が出土しています。



↑❻竹下浅間山古墳平面図

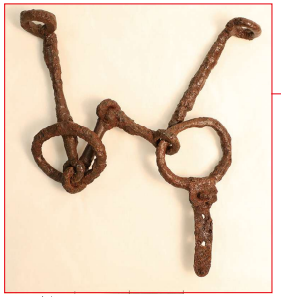
■出土した副葬品

→❼太刀

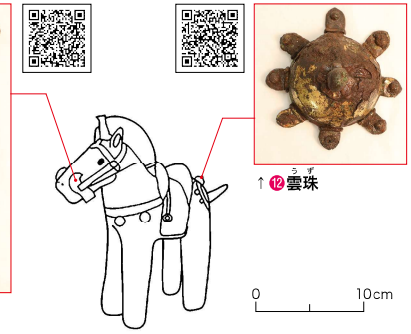
↑❽（上）鉄鏃　（下）刀子

↑❾耳環

↑❿（上）勾玉　（下）ガラス小玉



↑⓫轡

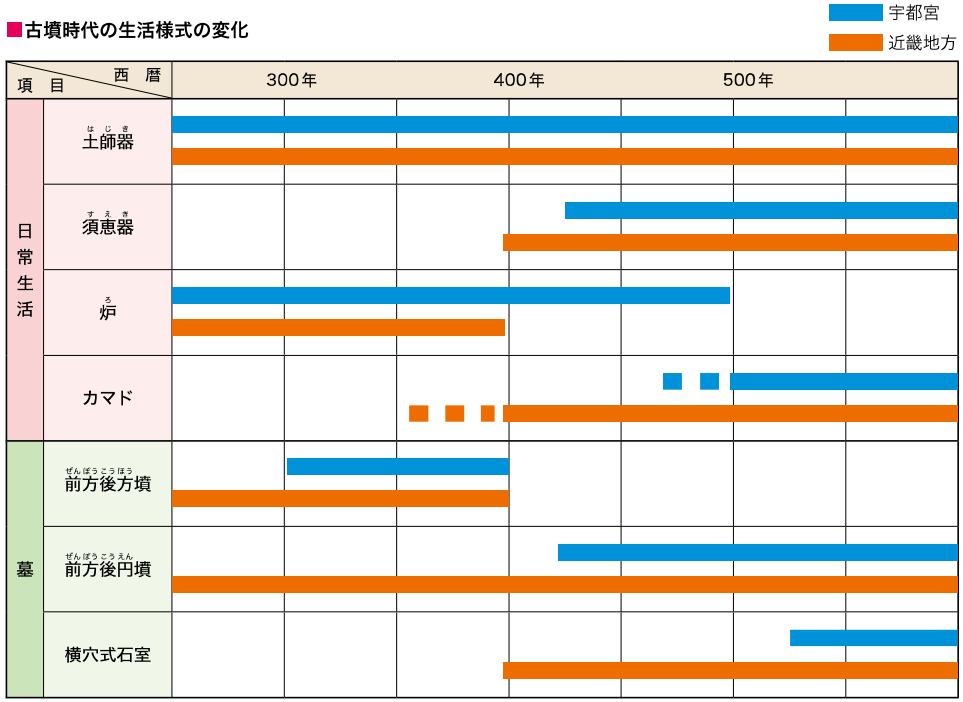


↑⓬雲珠

新たな文物の導入

下の表は、宇都宮市内の発掘調査事例から、当時の人々が使用していた生活用具や墓の移り変わりを当時の中心地である畿内と比較したものです。この表から、当時の人々の生活について考えてみましょう。

■古墳時代の生活様式の変化



須恵器

5世紀になると、食器や調理・貯蔵用として使われていた土師器に加え、大陸の技術の導入により登り窯を使って焼かれた須恵器が使われるようになります。

↑❶塚山南古墳から出土した須恵器

炉からカマドへ

6世紀を前後する時期に、煮炊きをする場が、それまでのイロリ(炉)から、カマドに変わります。カマドは粘土や川原石を使って造られています。

↑❷カマドの模型

馬

5世紀末～6世紀初めにかけて造られた塚山南古墳や下桑島西原2号墳から馬形埴輪が出土しています。このことから、この頃に一部の人が馬を使用していたことがわかります。

↑❸塚山南古墳出土馬形埴輪

律令政治が始まったころの宇都宮（7～9世紀）

1 律令体制下の下野国と東山道

下野国の国府は現在の栃木市に置かれ、中央政府の命令のもとに下野国を治めていました。国内は9つの郡に分かれ、現在の宇都宮は河内郡に属していました。

当時、都から陸奥国(現在の福島県、宮城県、岩手県、青森県)を結ぶ主要道である東山道は、南西部の足利郡から北東部の那須郡にかけて通っていました。[5] 道沿いには原則として30里(約16km)ごとに駅家が設けられ、河内郡内には田部と衣川の2つの駅家が置かれました。

→❹東山道

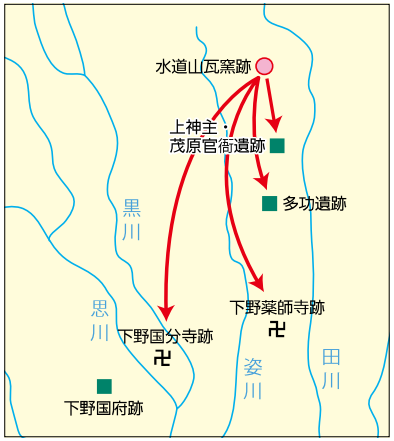
↑❺古代下野国と東山道ルート

都まで歩いていくと、どのくらいかかるのかな。

下野国から奈良の都まで税を運ぶのに、行きはおよそ34日、帰りは17日ほどかかったそうだよ。

2 瓦の生産　水道山瓦窯跡

中戸祭町にある水道山のふもとで、古代の瓦を焼く窯跡が発見されました。谷地形を利用して3基の瓦窯が確認され、1・2号窯では下野薬師寺跡(下野市)、3号窯で下野国分寺跡(下野市)と上神主・茂原官衙遺跡・多功遺跡(上三川町)の瓦が焼かれていたことがわかっています。この時代の瓦は、寺や役所などの特別な建物に使われていました。



↑❻水道山瓦の供給地

3 渡来人の姿

『日本書紀』によると、687年に朝鮮半島からの新羅人14人、689年と690年にも新羅人が下野国に移住させられています。宇都宮市内では、西下谷田遺跡(茂原町)・前田遺跡(上戸祭町)で新羅系土器が出土しており、[7] 新羅人の移住との関連がうかがわれます。

↑❼前田遺跡出土の新羅系土器

4 文字の普及

古代の日本での文字資料として有名なのは、埼玉県行田市の稲荷山古墳出土の鉄剣です。宇都宮市内の遺跡からは、土器の表面に墨書きをした土器❶(墨書土器)が出土しています。その中で最も古い事例は7世紀後半の西下谷田遺跡(茂原町)出土のものです。9世紀になると墨書土器の数は急増していることから、この時期以降、文字を読み書きできる人が増えたものと考えられます。

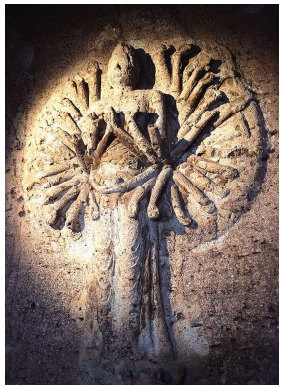
→❶鬼怒川沿いの西向遺跡出土の墨書土器
土師器の底に魚の絵が描かれ、横には「慶慶」の文字が書かれています。
(栃木県教育委員会蔵)

5 仏教の普及

大谷寺の洞穴壁面には、千手観音立像❷・釈迦三尊像・薬師三尊像・阿弥陀三尊像が彫られています。中でも、大谷寺の本尊である千手観音立像(大谷観音)は、像高が3.89mの半肉彫りされた均整の取れた仏像です。仏像は粘土や漆で形を整えたのち金箔が貼られていました。これらの仏像は、奈良～平安時代にかけて彫られたものです。

この他に、市内に残る平安時代の仏像は、多気山持宝院の不動明王坐像、西刑部町の「大関観音」の名で知られる聖観音菩薩立像があります。

→❷千手観音立像
(大谷観音)
(大谷寺蔵)



動画を見てみよう！

日本遺産
地下迷宮の秘密を探る旅
大谷観音(千手観音像)復元
～彫る文化を読み解く～

烽と河岸段丘

先人の知恵と工夫

ノロシを上げる最適な場所を探す

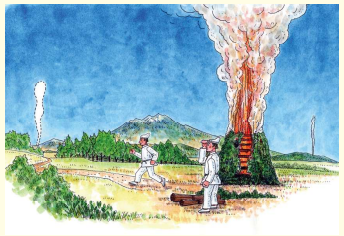
中世の城である飛山城跡(竹下町)の調査中に、12軒の古代の竪穴住居跡が確認され、その中の一軒から「烽家」と書かれた墨書土器❹が出土しました。「烽家」とは「ノロシ❺を上げる施設」を示す言葉です。

「烽家」は古代の緊急連絡施設で、『軍防令』では約20kmごとに設置するよう定められています。飛山の地は鬼怒川にせり出す見晴らしの良い場所で、対岸を古代の東山道が通っていました。

古代人は地形をよく観察し、適当な高さで、見通しのきく場所として鬼怒川にせり出す河岸段丘❸上に、緊急の連絡施設である「烽家」を設置したのです。

↑❸河岸段丘

↑❹「烽家」と書かれた墨書土器



↑❺ノロシを上げる様子

宇都宮の幕開け マップ

❻宇都宮の地形と遺跡分布

大宝律令と下毛野古麻呂

下毛野古麻呂は、下野国河内郡を支配した下毛野氏を祖先とする飛鳥時代の貴族。700年に、藤原不比等らとともに大宝律令の選定に携わり、701年に完成させました。また、下野国河内郡内に下野薬師寺を建立しました。709年に亡くなりますが、そのときの官位は式部卿大将軍正四位下で、地方豪族の出身としては異例の出世でした。

古麻呂の出身である下毛野氏は、二荒山神社の主祭神である豊城入彦命の子孫とされています。